

— 本学図書館のスペシャル・コレクションよ(4) —

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力

ケンペルの『日本誌』

18世紀初頭の「ベストセラー」となる

奥 正敬

18世紀初頭のヨーロッパで、当時の人々にはまだ馴染みの薄かった東洋の国「日本」を大々的に紹介したドイツ人がいた。この人、名前をエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716 —ケンプフェルもしくはケンプファとも呼ばれる—) といい、江戸時代の日本にオランダ東インド会社の医師として滞在し、帰国後日本で知りえた情報をもとに『日本誌』と呼ばれる書物の原稿を記した。やがて、彼の没後に英語で刊行されたその『日本誌』は、さらに多くの言語で出版され、100年を超えてヨーロッパ全域の人々に読まれる大ベストセラーとなったのである。

### 高い教養を積んで日本を訪れたケンペル

ケンペルは、ライン河上流のレムゴーという当時のリップ伯爵の領土 (現在のノルトライン＝ヴェストファーレン州レムゴー市) で牧師の子として生まれた。リューネブルクでギムナージウム (中学校と高校の一貫教育の場) の教育を受けたのち、ダンツィヒ (現在のポーランドのグダニスク) やケーニヒスベルク (現在のロシアのカリーニングラード)、さらにはスウェーデンのウプサラなど北ヨーロッパ各地の大学で博物学と薬学、医学の知識を重ね、ウプサラ大学で教授の地位が約束されるほどの専門家になったといわれている。その後、彼はモスクワやペルシアへ旅をし、その体験を中心にして、日本旅行終了後、『日本誌』に先がけて刊行した『廻国奇観』 (“*Amoenitatum exoticarum*”, 1712年刊) に纏めることになる。



『廻国奇観』初版 (本学図書館所蔵)

彼は、このロシアと中東への旅の後、東洋へ行く志をたて、オランダの東インド会社に入り船医

となった。やがて、その夢は実現しパタビアを経て日本に到着したのが1690 (元禄3) 年、その後1692 (元禄5) 年までの2年余り日本に滞在することになるのである。

### 日本での情報収集

ケンペルが『日本誌』を書く基となる日本国内の情報、江戸時代の前半である元禄年間初頭までのものである。この頃は徳川幕府開闢以来100年にさしかかろうとする時代で、安定した国内政治を背景として文化の華が開いた時期であった。ケンペルはこのような時代に長崎の出島に滞在し、居留地に出入りする通詞 (通訳) や一定の町人、さらにはケンペル自身が、「日本の事物を記述する上にはすこぶる豊富な収穫を齎しうる適材を得た」(今井正編訳『改訂増補ケンペル日本誌』) と回顧している下働きの青年などを通じて精力的に情報を集めたものである。

また、一方では彼が2年の間に2度も、片道90日余りかかったとされる商館長の江戸参府に随行している。この江戸参府とは、新任のオランダ商館長が江戸へ出向き、徳川幕府の將軍や幕閣に拝謁するもので、幕府側から一行への見聞に対する制限はあったものの、この旅を通じて収集した情報が生かされている。

### 多くの言語に翻訳された『日本誌』

こうして書かれたケンペルの『日本誌』には、前述の英語版 (1727-28年刊) やラテン語版 (1728



『日本誌』英語版初版 (左) とオランダ語版初版 (本学図書館所蔵) 年刊、オランダ語版 (1729年刊)、フランス語版 (1729年刊)、フランス語から翻訳されたドイツ語版で別名ロストック版 (1749年刊)、さらにはケンペルの遺産から発見された原稿によるドイツ語版で別名ドーム版 (1777-79年刊) などがあり、それらの版の中にはケンペルが意図した書名と主旨が異なるものも見られる。

ケンペルが東インド会社というオランダの組織